

身代わりの恋人

愛の罠に囚われて

目次

身代わりの恋人 愛の罠に囚われて

5

最愛の恋人 醒めない夢に抱かれて

255

身代わりの恋人 愛の罫に囚われて

## プロローグ

「谷川さん、もしかして緊張してますか？」

『株式会社クリハマ』と看板を掲げた大きな建物のエントランスを潜ろうというとき、松田さんが足を止め、わたしの顔を覗き込んだ。

三月のまだ冷たさの残る風が、頬と前髪を撫でていく。その前髪をくしゃりと掻きながら、わたしは顔を上げた。

「えっ、わ、わかりますか？」

「うん。今深呼吸してみましたよ」

言いながら、松田さんが可笑しそうに声を立てて笑った。

頭の片隅で、彼の、二重の大きな瞳を細めた人の好きそうな表情を、可愛いな——なんて思いつつ、わたしは恥ずかしさで「だって」と口にする。

「初めての商談なんでもん、仕方ないじゃないですか。松田さんは懇意にしている会社さんが相手だし、何度も経験あるから手慣れたるでしょうけど……」

「ごめん、そうでしたね」

彼はすまなそうに片手を拜むような形にすると、小さく眉を下げた。

「——いや、谷川さんは普段からしつかりしてるし、なんでもソツなくこなしてくれるから、忘れてました」

「そんなことないですよ。やる気だけは人一倍ですよ」

彼にそう評価されていたのは誇らしいけれど、わたしは首を横に振った。

まったく違う業界から現在の菓子メーカーに転職したばかりのわたしにとって、自分の仕事の内容を振り返る余裕なんてなかった。この数ヶ月ただひたすら、松田さんの下で、やるべきことをがむしゃらにやってきただけに過ぎない。

「そのやる気が一番大事なんですよ、営業って」

「そう、ですかね」

「うん。心配しないでいいですよ、自信持って。谷川さんなら大丈夫」

松田さんは、安心させるみたいに深く頷いて言った。彼の双眸が、確信しているという風に力強くわたしを見据える。

『谷川さんなら大丈夫』

その言葉と瞳の意志で、不思議と妙な身体の強張りが消え、気持ちのスツと楽になった。と同時に、まったく別の意味合いで、ドキドキしてしまう。

彼のような魅力的な男性に褒められるのは、純粹に嬉しい。

スラッとしてスーツが似合う体形だし、ヘアスタイルも理知的で嫌味のない黒髪のマッシュ。

二重の大きな目が特徴的なやわらかい雰囲気顔立ちなのに、鼻筋は通っていて男らしさも感じる。しみひとつない肌は滑らかで、清潔感に溢れている。

素晴らしいのはもちろん見目だけじゃない。

容姿を抜きにしても、彼は優しく、とても信頼できる上司だ。ずっとチャレンジしてみたかった仕事に運よく就くことができ、右も左もわからないわたしに営業のイロハを教えてくれ、育ててくれた。それだけに止まらず、こんな風に励ましてくれたり、勇気付けたりもしてくれる。

それが嬉しくて、最近では、彼の存在がさらに頑張りたいという動機にも繋がっているのだ。彼がいるから、もっと一生懸命に仕事をしようと努力することができる。尊敬する先輩であり、憧れの男性。

わたしにとって、松田さんはそういう、大切な存在になりつつあった。

「ありがとうございます、頑張ります！」

わたしが清々しい気持ちで言うのと、松田さんはもう一度頷いたあと——何故か、寂しい微笑を見せた。

まだだ。彼は不意に、そんな表情を見せるときがある。わたしは、それが気になって仕方なかった。

まるで、誰かとの別れを惜しむような、目には見えない何かに追い縋るような。名残惜しげな眼差し。

そのあと、彼は決まってわたしから顔を背ける。「どうしたんですか？」と彼の背中に問いかけ

たいけれど、いつもできずにいた。

こんなことを訊けるほど、まだ松田さんとわたしの関係は打ち解けたものではなかった。

仕事で接する機会は多いのに、どこかよそよそさが抜けず、一定の距離を保ったままだ。おそらくわたしと彼がこれ以上親密になることはないだろう。わかっている。

わかっているけれど……それでも、もっと彼に近づきたい。彼に信頼してもらいたい。

そして、彼が時折纏う影の理由を知りたい。そう思ってしまうのだ。

「行きましょう。そろそろ約束の時間なので」

「はい」

腕時計に視線を落とした松田さんに促され、わたしも歩き出す。

今ほどにかく、目の前の仕事をこなすことを考えよう。

わたしはもう一度深呼吸をしてから、彼に続いてエレベーターホールへと進んでいったのだった。

1

「——では、お手元の資料をご覧ください」

小ぢんまりとした部屋に、松田さんの落ち着いた低音が心地よく響いた。

株式会社クリハマの一部屋で、わたしと松田さん、ふたりでの初商談が始まった。

わたしはページを捲ることも忘れ、わたしのすぐとなりで流暢に内容を読み上げる彼の声音に、しばし聴き入ってしまった。

それまでの優しい口調とは違う、凛とした語調。ここからはビジネスなのだと言ひきするみたいな真剣な横顔に、ドキッとす。やっぱり素敵だ、松田さんは。

「弊社青葉製菓では、来年夏の目玉商品としまして、弊社のメイン購入層に当たる若い女性をターゲットに、夏らしく涼しげで思わず手に取ってしまいたくなるような、インパクトのある商品を発売する予定です。サンプルをお持ちしていますので、是非お試しください——サンプルを」

松田さんはそう言うと、わたしに呼びかけた。

「あっ、はい」

いけない、見惚れてないで仕事に集中しなきゃ。初めての商談、それもあのクリハマさんとなんだから。

商談相手である株式会社クリハマは、大手スーパーやコンビニに太いパイプを持つ、菓子業界では一、二を争う卸売会社だ。

都内の一等地に、七階建ての自社ビルをデンと構えているのはさすがといったところ。ビルの入り口で、わたしの挙動を見た松田さんが笑っていたけれど、最初の商談がこの場所だなんて、そもそも緊張しないはずがないのだ。

わたしたちメーカーは、三ヶ月に一回、新商品を開発することに、卸売会社に向いてプレゼンを行う。そこで卸売会社の担当に商品をチェックしてもらい、気に入ってもらえるかどうかで、

今後それらが卸売会社と繋がるスーパーやコンビニなどで多く売り出してもらえるかが決まる。

商品の売れ筋は、この段階である程度決まってしまうと言っても過言ではない。

いわば、第一関門だ。ここを上手く乗り越えられれば、その後の商品の動きに期待ができるので、少しでもいい印象を持ってもらわなければ。

わたしは慌てて傍らの椅子に置いていた紙袋の中から、目当てのものを取り出した。

ちょうどわたしの手のひらを広げたくらいの大きさのパッケージは白一色で、黒文字で大きく「2020年夏新商品 Glossy (仮)」と印字されている。

企画段階では、商品パッケージまでは完成されていないことも多々ある。我が青葉製菓は卸売会社での反応を受け、パッケージに反映できそうなアドバイスをもらえたら、積極的に採用しているのだ。

「どうぞ」

わたしは、斜向かいにいる眼鏡の男性——大場さんにサンプルを差し出した。

細身で日焼けした肌が特徴的な彼はそれを受け取り、パッケージを破ると、中に入っている飴玉をひとつ摘み上げ、しげしげと見つめる。

大場さんはクリハマの営業一部の次長で、西東京エリアの責任者。メーカーの間では西東京の顔と呼ばれており、彼に気に入られるか否かで商品の売り上げが大きく変わってくると言われている。だから、さつき松田さんに紹介してもらいご挨拶をしたとき、情けなくも声が震えてしまった。

大場さんご自身は気さくな方で、わたしの慣れない素振りに笑って「頑張ってるね」なんて声を掛

けてくれたけれど、結構気難しくて厳しいところもあると聞いている。失態を晒さないように気を付けないと。

「へえ、確かに面白い」

暫く飴玉を観察していた大場さんの目が、眩しそうに眇められる。

「うちの『Glossy』のコンセプトは、夏祭りです。夏祭りの高揚感あるキラキラした情景を、一粒の飴の中に再現しました」

大場さんの反応にホツとした様子の松田さんが、口元に笑みを湛えて説明する。

『Glossy』という名前の通り、大小様々な大きさのキャンディチップや、ラメのように輝くパウダーが配合された飴玉。

小さいところに憧れた、プラスチックの透明な球体の中に、色とりどりのビーズを詰めたヘアゴムを思い起こさせる、華やかで存在感のあるビジュアルだ。若い女性ならば一目見て「可愛い!」「欲しい!」となりそうなお、これまでにはなかった商品ではないかと思う。

「フレーバーはりんご飴やあんず飴のイメージで、アップルとアプリコットの二種類で展開する予定です。パッケージは準備中ですが、やはり夏祭りのイメージに合ったデザインで、小窓を作った実際の商品を覗けるようにしたいと考えています」

「いいんじゃない、こういう商品。最近は、味だけじゃなくて見た目に注目させる菓子も需要があるだろう。ほら、あの、画像投稿アプリだっけ?」

「そうですね。他社さんの商品でも、そこに投稿された写真が火付け役になって品薄になった事例

がいくつもありますし。弊社もそのブームに乗つかれないかと、企画部で案を出したみたいですよ」

「なるほどね」

話しながら、大場さんが飴を口の中に放り込む。

「……うん、味も悪くない」

そして、飴玉が溶け出すまでの少しの間あと、そう続けた。そんな大場さんを前に、松田さんは嬉しそうに頬を緩める。

「ありがとうございます。大場さんに認めて頂けると自信になります」

「まあ、こっちも松田くんが持つてくるものなら信頼してるから。心配しなくても推しとくよ。あ、そのうちまたサッカーしような」

「ありがとうございます。また誘ってください」

「もちろん。松田くんが来ると、君目当てにうちの会社の女の子たちがこぞって応援に来てくれるんだよ。イケメンは得だね」

大場さんは言いながら悪戯っぽく笑った。

クリハマさんにはサッカーチームがあつて、運動不足解消を目的とした人から、昔ユースチームでプロを目指した人まで、社内外問わず誰でも参加OK。大学時代にサッカーサークルに所属していたという松田さんは、ちよくちよく呼ばれているようだ。

……でも、他社の女性社員にも人気があるとは思わなかった。確かに松田さんの容姿はかなり目を惹くし、整い過ぎているくらいだ。

容姿とスタイルの良さはもちろんのこと、特に素敵だなど思うのは、彼の手。

いつも丸く短く切り揃えられた爪と、ささくれや皮剥けのない長い指先は、スマホを操作しているときや書類の受け渡しのとくによく目にするけれど、思わずじつと見入ってしまう。

ああいう細かな身だしなみを気にすることができると、イコール細かいことに気を遣える、心配りができるって意味だと思う。

外見だけじゃなく、中身もイケメンだからこそ、曲者である大場さんの心を掴むことができたのだらう。

「いえ、そんな。そうだ、大場さん、今度呼んで頂く際は谷川もご一緒してもいいですか？」

イケメンと持て囃された松田さんは困ったように笑ってから、わたしのほうへ視線を向けた。

「ん、君、サッカー好きなの？」

「あ、はい。見るのもやるのも好きです」

大場さんに訊ねられて、慌てて頷く。

本当のところ、大学の授業以来サッカーボールには触っていない。でも、身体を動かすことは嫌いじゃないし、テレビでサッカー観戦をすることはある。

「いいねー。うちは女子社員だけの試合とかもあるから、よかつたら出てよ。女子は人数少ないから、みんな喜ぶよ」

「はい、是非お願いします！」

サッカー好きの大場さんは、わたしの返事に気を良くしたらしい。眼鏡の奥の瞳がぐつと優しく

なつたように感じられた。

やった。もし本当に呼んでもらえたら、松田さんが活躍する姿をこの目で見られるかもしれない。それはラッキーかも。

……とか、邪なことを考えてしまった。わたしったら、松田さんは仕事に繋がると思ってた話にしてくれたっていうのに。

「そういえば松田くん、彼女——谷川さん？ 新人って言ってたけど、新卒の時期じゃないよね」

大場さんは、わたしが最初に渡した名刺を見ながら、松田さんに訊ねる。

「ああ、はい。彼女、中途なんですよ」

「二ヶ月前に入社しました。今、二十五です」

わたしが言うと、大場さんは意外そうに目を睨った。

「落ち着いてるわけだ。新卒の子はどうもオドオドソワソワしてるけど、そう見えなかったから」  
「ですよ。僕の二つ下とは思えないくらいしつかりしてますよ」

大場さんの言葉に、松田さんがわたしを見つめながら賛同する。彼の瞳に自分が映っているのが見えて、わたしは慌てて視線を下げて首を振った。

「いえ、全然です。まだわからないことばかりで、松田さんに教えてもらってなんとかなっている状態なので。早く自分でいろいろできるようにならないといけないな、とは思ってるんですけど」  
松田さんに褒められるのは嬉しいけれど、まだ何もできない自分にはもったいない評価で恐縮してしまう。

大場さんはやや上を向きながら、大きく声を立てて笑った。

「入って二ヶ月じゃしょうがないよ。松田くんだって今でこそ優秀な営業マンだけど、入ったばかりのころは俺もあれこれ煩く言ったりしたから」

「大場さんには何から何まで教えて頂きましたよね。本当に感謝してます」

どんな仕事でも首尾よくこなす松田さんも、最初から完璧なわけではなかったということなのだろう。つい親近感を覚えてしまう。

「松田くんの下についてれば、谷川さんもすぐ一人前の営業マンとして活躍できるから焦らなくていい。今後、期待してるよ」

「ありがとうございます！」

わたしは大場さんに身体を向けると、深々と頭を下げた。

——どうやらわたしの人生初めての商談は、好感触のようだった。



「お疲れ様でした。上手くいってよかった」

クリハマの自社ビルを出て駅へと向かう道の途中、松田さんが劳いの言葉を掛けてくれる。

あのあと、いくつか他商品のプレゼンをして大場さんから要望やアドバイスを頂いた。商品によつては厳しい評価が下つたものもあつたけれど、致命的な指摘はなく、その商品も無事にクリハ

マの取引先へと売り込んでもらえることとなった。

「ほぼ松田さんのお陰でしたけどね。次は、もつと役に立てるように頑張ります」

緊張からの解放と、なんとか無事に済んだという安心感で自然と表情が綻ぶ。

それは松田さんも同じであるみたいだ。

行きよりも表情がやわらかいし、言葉の語尾も妙に軽く弾んでいるように聞こえる。会話の傍らで、いかにも仕事中、というキリツとした表情もいけれど、自然体の彼も素敵だ——なんて考えてしまう。

「いや、十分な受け答えでした。商談の内容に関しては、今の段階では俺とか同行する人間のプレゼンをよく聞いて、いざというときに自分の言葉で説明できればそれでいいんです」

「そうですかね」

「それに大場さんの噂、あちこちのメーカーから聞いてると思いますけど、それに振り回されず、委縮しないできちんと応対できてましたし」

「ごくごく当たり前というか、無難な返事しかできなかったんですが、あれで正解でしたか？」

「その当たり前の応対もできなくて辞めてく人材も多いんです。人対人の仕事だと、ある程度のコミュニケーション能力がないと成り立たないから。そういう意味でも、今日は上出来でしたよ」

「それなら、よかったです」

もう少し仕事の話にも積極的に参加するべきかとも思ったけれど、段階を踏んでこなしていけばいいということであれば、松田さんの言う通り『上出来』だったのだろう。本当、よかった。

我ながらかなり気を張っていたことに気付き、小さく息を吐くわたしを見て、松田さんはそつと目を細めた。

「この時期の新入社員ってことで、大場さんも印象に残ったんじゃないですかね。谷川さんのこと」

「やっぱり珍しいんですかね」

「うちの会社にはあんまりいないかもしれないですね。言われてみれば、中途ってどうしてもじゃなければ採らないような気がします。うち、営業は男ばかりで離職率低いから、必然的に欠員も少ないし」

「言われてみれば」

会社での様子を思い浮かべて頷く。

わたしたち営業部は、九割が男性と言っている。となりの経理部は女性が多いから、全体的な比率には差が見えず、あまり気にしたことがなかった。

「女性の営業志望自体が男性に比べて少ないかもしれないですね。体力的にキツイことも多いし」  
「そうですね。想像よりもキツかったかもしれないです」

松田さんの言葉に賛同して笑う。

営業という職種はとにかく体力が要る。重たい資料やサンプルを両手に抱えて客先に赴いたり、展示会で歩き回ったり。プレゼンで日帰り出張なんていうのも結構ある。

だから最近、暇さえあれば体力の回復のため、家に引きこもってひたすら眠りこける——なん

て、残念な休日の過ごし方でバランスを取っている状態だ。

「なのに、どうしてうちで営業をやるうって思ってたんですか？」

なんでもない、ただの雑談の延長のように思われたけれど、わたしはその問いかけに変な高揚感を覚えた。無意識のうちに足を止めて、松田さんの顔を見上げた。

「あ、ごめん。言いにくいことですか？」

わたしが立ち止まったのを見て、申し訳なさそうな様子で彼も歩みを止める。

変なことを訊いてしまった。松田さんの顔にそう書いてある。

「いえ、全然。そういうわけじゃ」

気まずそうに視線を俯げる彼に、わたしはぶんぶん両手を振った。

少し意外だったのだ。松田さんは、わたしが訊いたことに対しては真摯に答えてくれるが、彼のほうからわたしに何かを訊ねてくることは、割と、まあまあ、珍しい。

そういう珍しいことが起きると、わたしに興味を持ってきてくれるんじゃないか、とか、自分勝手に自惚れた期待が湧き上がってしまうけれど、そうではないこともちゃんとわかっている。気まぐれだとしても嬉しいものは嬉しい。

「——その、人生で初めて、ちゃんとやってみたいって思った仕事なんですよね。わたし、それまで印刷会社で総務の仕事をしていたんですけど、あまりやりがいを感じていなくて」

顔を閉じると、当時の光景がつい昨日のこのように浮かんでくる。

大学生のころ。これといって夢や目標がなかったわたしは、就活に入ると手当たり次第に様々な

企業を受けまくった。

けれど、結果は惨敗ざんぱい。このまま就職浪人一直線か——と危ふんだとき、拾ってくれたのが件の印刷会社だった。

この際正社員として働かせてくれるならどこでもいい。働けるだけマシだ。そんな適当な気持ちで過ごすうちに、漠然と「これでいいんだろうか？」なんて疑問が頭を過るようになっていった。

たまに会う大学時代の友人は、上司や取引先の悪口なんかを言いつつも、自分の仕事を誇らしそうに話している。そんな姿を、たまらなく羨ましいうらやまいと感じた。

わたしには、そんな風に一生懸命になれるものなんてない。

このまま、今の会社で何をするべきか、何をしたいかわからずに過ごしていくのだろうか？ 考えただけでも不安で、怖いと思った。今でさえそう思うのに、数年後の自分はこの環境をどう思うのだろうか。

ならば、今動かなければ。自分の人生を変えられるのは自分だけなのだ。

「それで、うちの会社を受けたんですね？」

「はい」

どちらともなく再び歩き出すと、それまで話にじつと耳を傾けていた松田さんが訊ねる。わたしは頷いて続けた。

「転職活動中に真つ先に目に留まったのが、青葉製菓の求人でした。昔からお菓子が好きで、特に

青葉製菓のキャンディやグミをよく買ってました」

青葉製菓の主力商品は、なんとといっても飴やグミなどのポケット菓子だ。わたしは特に、グミを気に入っていた。

美味しいのはもちろんのこと、女子がバッグに入れて持ち歩きやすい可愛らしいパッケージのものが多く、寧ろパッケージが気に入ったからとレジに持つていくことすらあった。

「お菓子って、小さな幸せを運んでくれるっていうか、一口食べただけで人を笑顔にできるじゃないですか。そういうの、素敵だなんて思ったんです。わたしもお菓子に関わる何かに携わりた

いって」

「いいこと言いますね」

松田さんが優しく笑った。わたしはその横顔を盗み見るみたいに、ちらりと視線を向ける。

「そういう並々ならぬ思いがあるから頑張れるってことですね」

「はい。ちゃんと目標ができたからには、それに向かって進んでいかなきゃいけませんから」

「目標？」

「わたしが売り込んだ新商品をヒットさせることです。それが定番商品になれば、こんなに嬉しいことはないじゃないですか」

この業界に入って初めて知ったことだけど、この世にはごまんと菓子が生まれ、それらのほとんどがほどなくして消えてしまう。

いくら販売者側にとって出来が良く、美味しくて、売れなければ生き残れない。

「頼もしいですよ。俺も、企画部がアイデアを絞<sup>しぼ</sup>って、あれこれ試行錯誤<sup>しこうかくご</sup>してやっと生み出してくれた素晴らしい商品を、ひとつでも多く売り込めるようになって思いながら仕事してるつもりです」  
松田さんはわたしよりもその厳しさをよく知っているからか、自分にも言い聞かせるみたいにして同意してくれた。

その重みのある言葉が、彼の誠実な人柄を強く表しているようで、胸に熱いものが溢れる。

「松田さんのそういうところ、素敵ですよ」

意識するよりも早く、わたしは弾かれたように言葉にしていた。

「え？」

「わたしはまだこの仕事を始めて間もないから、今ちょうど気持ち盛り上がっているところだったりするんですけど、松田さんみたいに、長く営業を続けていて、きちんと結果を残している人が、そうやって初心を忘れずにいられるのって、尊敬します。……好き、です」

言葉の通り、上司としての彼に感じている尊敬の念や、わたしもこうありたい、見習いたいという意図でそう口にした。

「……………」

けれど、松田さんの反応を見るに、明らかに困惑していた。

虚<sup>きょ</sup>を衝<sup>つ</sup>かれたように目を瞠<sup>みは</sup>ったあと、さっとわたしから視線を逸らしてしまう。

理由はすぐに思い当たった。

最後の言葉が妙に思わせぶりの調子になってしまったせいか、ともすれば別の類<sup>たぐい</sup>の想いをアピ―

ルしているように聞こえてしまったのだろう。

——「好き、です」って。

しまった！　そういうつもりじゃなかったのに。

ううん、そういう疚<sup>やま</sup>しい感情がまったくなかったかと訊かれば嘘になる。わたしの中で密かに芽生えていた尊敬とは違う想いが、抑えきれずに彼に届いてしまったのかもしれない。

でも、今のは純粹に、彼の考え方が素敵だってことを伝えたかっただけなのに！

「あ、なんか……ごめんさい。へ、変な意味じゃないんです」

自分が思うよりもずっと小さい声で訂正しながら、変な意味ってなんだろうと内心でツッコむ。

こういうとき、言い訳するほうが余計に怪しいのかもしれないけれど、言わずにはいられなかった。

心臓がイヤな音を立てている。トートバッグの持ち手を握<sup>にぎ</sup>る手のひらも、じつとりと湿ってきた。急に訪れる沈黙。けれど、お互いそれを振り切るように、一定のペースで歩き続ける。止まったら、なおさら気まずくなるのがわかっていいるからだ。

横目で松田さんの様子を覗き見る。口を引き結んで前を見る彼の横顔は、何を考えているのかまったく読み取れない。

そうこうしているうちに、わたしたちは駅の構内に到着した。

大場さんに挨拶してビルを出たのが午後五時前。ターミナル駅のせいか、この時間帯になると、仕事を終えて家路を急ぐ人たちの行き交う姿も多く見受けられる。

松田さんは、改札の先にある大きな電光掲示板のそばでわたしのほうを向き直ると、いつも社内で見せる穏やかな表情を作って口を開いた。

「——今日は本当にお疲れ様でした。俺は会社に戻りますけど、谷川さんはそのまま直帰してください」

まるで先ほどのやり取りなんてなかったみたいに、彼が明るく言った。

「え？ でも、今日指摘されたことを戻って纏めない」と

会社の最寄り駅には十分も乗れば着くし、まだ帰るには早い。けれど、松田さんはわたしの言葉を遮るように「いや」と片手を前に出した。

「初めての商談で疲れたんじゃないですか？ 企画部への報告は俺がしておくので、いつもバタバタしている分、今日くらいはゆっくり休んでください」

「で、でも」

このまま別れるのは気まずい。だから、当たり前障りのない会話をして、いつもの雰囲気を取り戻せればと考えていたのに。

「大場さんにお礼のメールを送るのだけ忘れないで下さいね。せっかく名刺交換したので」

親切に上司としての指導をしてくれたつも、松田さんは、もうこの場で解散することを決めている。表面には見えない頑なな意志を感じ取ると、これ以上、抗うのは無意味に感じた。

「……はい、わかりました。今日はありがとうございました」

「こちらこそ。お疲れ様でした、また」

わたしが頭を下げると、彼はひらりと手を振り、一番線に続くエスカレーターのほうへと消えていった。

「……あー、やつちやつた」

暫くその場で立ち尽くしていたけれど、彼の背が完全に見えなくなると、脱力して呟く。そして彼とは逆方向の、四番線に続くエスカレーターへと重い足取りで進んでいく。

ゆつくりと上昇しながら、頭の中で、ここ数分間の出来事をひとり反省し始めた。

やつぱり、「……好き、です」なんて含みのある言い方しちやつたのが間違いだっただよね。そりゃ、彼だってそういう意味なんじゃないかって警戒するだろう。

ううん、そもそも。ちよつと松田さんに興味を持ってもらったからといって、ペラペラと喋り過ぎだったんじゃないか。

いや。興味を持ってもらっただけで表現すら、自意識過剰なのかも。あれは単に、話の流れで訊いたに過ぎないんだし。

ああ、本当、やり直したい。数分前に戻りたい。

頭の中に巻き起こる後悔の渦。何をしたところで時間を戻せるわけじゃないから、しょうがないと割り切るしかない。

……でも、一番応えたのは、わたしの見せた好意を彼が迷惑がっていたという事実だ。

あの場で一緒に帰りがたがらなかったのは、早い話が面倒だったのだろう。

仕事を教えるため普段から行動を共にする部下に、それ以上の感情を抱かれても困る。それが彼

の率直な気持ちなのだ。

よくよく思い出してみれば、初対面のときからそうだった。入社初日の社内で、部長から松田さんを紹介してもらったあのときだって――

「松田くん、ちょっといいか」

営業部の部長である一柳さんのデスクに呼ばれると、彼はそのとなりの席でパソコンのキーを叩く男性に声を掛けた。

「はい」

振り向いた男性は、一柳部長とわたしの顔を見るなり、驚いたような、ショックを受けたような、ちよつと怖い顔をした。彼が整った顔立ちをしていることもあり、その一瞬が妙に印象的だった。

「前に話しただろ、新しい営業の谷川裕梨さん。しばらく、松田くんところで仕事を覚えてもらうって」

一柳部長は松田さんが瞬間的に見せた表情に気付かなかったのか、はたまた、気付いていても気にしていないかったのか、そのままのトーンで話を続けた。

「あの、よろしくお願いします」

わたしは努めて丁寧言い、頭を下げた。

奥二重で目尻が上がり気味のわたしは、第一印象が勝気そうに見えるらしい。まったくそんなことはないのに、周囲から「怒ってる？」と訊ねられることが多々あった。

もしかしたら、この男性もわたしが不機嫌に見えて驚いたのかもしれない。でなければ、初めて顔を合わせる彼にそんな反応をされる理由がない。

誰だって、直属の上司になる人に悪い印象を持たれたくないものだ。

「……こちらこそ、よろしくお願いします。営業部、第一営業課係長の、松田尚宏です」

係長。確かにそう言った。

風貌ふうぼうからしてわたしと同一年くらいだろうに、もう役職に就いているなんて。この人は結構、いやかなりすごい人なのかもしれない。

「松田くんは青葉製菓きつての優秀な営業マンだから、彼からわからないことはなんでも訊いて、必要なものを吸収してほしいな」

「褒め過ぎですよ。ハードル上げないでください」

からかい口調の一柳部長に対し、苦笑を浮かべる松田さん。その様子から、彼がポーズではなく本心で言っていることが窺うかがえた。実力がある人の謙虚な姿勢は好感が持てる。

「それじゃ、仲良く頼むよ。おふたりさん」

一柳部長は「喉が渴かわいた」とか独り言を言うと、立ち上がってフロアの入口のほうへと歩いていく。おそらく、エレベーター近くにある自販機に向かおうとしているのだろう。

わたしは、もう一度松田さんの顔を見た。

彼は、わたしの視線を感じているのかいないのか、パソコンの操作に戻ろうとする。もしかしたら、わたしの面倒を見ることにあまり乗り気ではないのかもしれない。

「あの、わたし、何をしたらいいでしょうか」

しかし、彼の下で学べという一柳部長の言葉を無視するわけにいかない。意を決して訊ねてみる。すると、松田さんの唇が「あ」の形に動いた。

「すみません、何か指示をしないと、ですよね」

彼はパソコンチェアごと振り返ると、わたしの顔を見つめた。その目が、探るように微かに左右に動く。

「……あの？」

「いや。……それじゃ、このあと卸の展示会があるから、同行してもらってもいいですか？ 口で説明するよりも、実際に見てもらったほうがわかりやすいと思うので」

「あつ、はい」

わたしが訝しんでいることに気付いたのか、彼は視線を逸らすとそう言って「よろしくお願いします」と会釈した。

……思い出したら、あのときのことか今さら気になってきてしまった。

わたしが意識し過ぎていた？ 初日でお互い緊張していただけ？

実はもうひとつ、松田さんについて気になっていることがあった。わたしに対する口調や態度が、他の部下に対するそれと違うのだ。

この二ヶ月、ほぼ毎日のように彼に同行しているというのに、彼はわたしに対して丁寧語を絶対

に崩さない。

松田さんは勤続六年目に入る先輩であり、わたしは入社二ヶ月のペーペー。さらに、彼はわたしの二つ年上の二十七歳だ。

彼にはわたしの他に、指導している部下がふたりいる。いずれも男性で、二十三歳と二十四歳。彼らふたりにはタメ口で、冗談を言ったりする。至ってフランクな接し方だ。

正直、ふたりが猛烈に羨ましい。思わず、嫉妬してしまうほどに。

丁寧語で接してもらうのは一見尊重されているようにも思えるが、そうじゃない。最近、間にくつきりとした線を一本引かれているような、すぐく他人行儀な所作に感じてしまう。

ホームに着くと、ちょうど電車が到着するところだった。エスカレーターからの降り口から一番近い乗り場へと、おのずと小走りになる。

先頭車両が通り過ぎると同時に一陣の風が頬を打った。胸までのロングヘアが靡く。

電車がゆっくりと停車する間、あまり考えたくはないけれど、ただ単にわたしが嫌われているのではないかという可能性に辿り着いてしまった。

知らず知らずのうちに失礼な発言をしていたのだろうか？ それとも、見えないところで致命的な迷惑をかけていて、松田さんに負担をかけているとか？

どちらにしても、わたしを下に置いておくことに辟易しているんじゃないだろうか？

電車のドアが開くと、ターミナル駅らしく、吊革につかまっていた人の半分以上が続々と降車する。

それらが落ち着くのを待ち、わたしは車両に乗り込んだ。席が空いていたので、腰をかけながら大きく息を吐いた。

わたしなりに頑張っているつもりだけれど、まだまだ足りないのだろう。

仕事で彼の役に立ちたいし、評価してもらいたい。あわよくば、部下としてのわたしだけではなく、ひとりの女性としても。

もつと松田さんに近づきたいわたしと、わたしと距離を置きたい松田さん。

相反する願望を持つわたしたちに、折衷案なんて存在しない。

重怠い感情に浸食され、胸やけしそうになりながら、わたしは自宅方面に向かう電車に揺られていったのだった。

## 2

ここ最近の青葉製菓のヒット商品に、『ドルチェガミー』がある。

世界各国のスイーツのフレーバーをガミにするという、挑戦的かつこれまでになかった試みが当たり、新し物好きの女子高生を中心に売り上げを伸ばしている。その人気のお陰で第二弾、第三弾とフレーバーを変えて、未だに売れ行き好調だ。

何を隠そう、この『ドルチェガミー』の流通に貢献したのが松田さんだ。

松田さんは、試作段階の『ドルチェガミー』を食べて、これは売れると確信した。それからすぐにクリハマの大場さんに連絡を取り、絶対に当たるのでクリハマの主要取引先の各店舗に流してほしいと熱烈に訴えたのだそう。

松田さんを信用し、気に入ってる大場さんも、『ドルチェガミー』の件では当初、松田さんの言葉に否定的だったみたいだ。

ガミの定番といえは、やはりフルーツフレーバーだ。だから、こういうミーハーなイロモノ商品が当たるとは思えない、と。クリハマの他の営業も口を揃えて「売れにくいのでは」と言っていた。けれど、あまりに松田さんが熱心に勧めてくるものだから、「松田くんがそこまで言うなら」と、大場さんの鶴の一声。市場に多く出回ることとなった。

するとどうだろう、『ドルチェガミー』は売れに売れ、品薄状態に。クリハマも青葉製菓も嬉しい悲鳴を上げることとなった。

購買層に刺さる商品を開発した企画部はもちろん素晴らしいけれど、早々に売れると確信した松田さんの千里眼にはただただ脱帽するばかりだ。

「谷川さん、これチェック頼んでもいいですか？」

「はい」

左手側から、ダブルクリップで留められた書類が差し出される。

これは、松田さんが作成している、『ドルチェガミー』の第四弾の販促用資料案だ。

わたしのデスクは松田さんの右どなりに位置している。営業資料や商品サンプルのやり取りなど

がスムーズにできるようにとの配慮だけれど、それが仇になるときもあるのだと、今日しみじみ思った。

昨日、あんな気まずい別れ方をしてしまったから、この一日は松田さんがどんな態度で接してくるのか、とてもモヤモヤしていた。

結果から言えば、わたしの心配は杞憂だった。彼は普段とまったく変わらなかったのだ。いわゆる、大人の対応というヤツ。

それも、単純にスルーするという姿勢にとどまらず、わたしに昨日の出来事を持ち出させまいという圧力すら感じた。

穏やかな笑顔という名の圧力。わたしたちは昨日、商談が終わると心地よい疲労感とともにただ辛い合つて別れたのだとしても言いたげな。

とはいえ、わたしも分別のある大人のつもりだから、彼の気持ちは理解できる。

自分にとって興味のない——いや、それどころか使えないヤツだと思われている可能性だってある女性。

しかも、これからも仕事で長い時間を共にするだろう部下に甘ったるい好意をアピールされたら、気が付かないふりをしてはぐらかしたいと思うのが一般的だろう。

昨日の件に関しては、余計なことを言ってしまったわたしが悪いのだ。松田さんを悪者にはできないし、してはいけない。

わたしは自分のデスクの右端に置いている、手のひらサイズの置時計に視線を滑らせる。

時刻は午後八時すぎを示していた。

残業中にこんな浮ついたことばかり考えてはいけけないと、わたしは松田さんから渡された資料案に目を通す。

これは『ドルチェガミー』の販促において営業が共通で使用する資料案だ。この手の商品ごとの販促用資料は、ほぼ松田さんが作成している。

明日は松田さんとふたり、朝一で橡葉商店さんという別の卸売会社さんに商談をしに行くため、内容の確認と、誤字脱字などの文章チェックをしてほしいと頼まれていた。

わたしは一ページずつじっくり目を通しながら、該当箇所を真剣に探していく。

『ドルチェガミー』はひとつのパッケージに三種類のフレーバーがアソートされている。どのフレーバーも、当初のコンセプト通り海外のスイーツだ。

第三弾までは売り上げ重視のかなり力強い路線だったそうだが、でも、第四弾は購買層を広げるため、『豆花』『芋頭酥』『ピサンゴレン』と、敢えて意表を突くようなチョイスをしたらしい。

豆花は日本でも有名だけれど、海外旅行と無縁なわたしは『芋頭酥』やら『ピサンゴレン』なんて聞いたことすらない。こんなに馴染みのないチョイスで大丈夫だろうかと疑問に思ったけれど、逆にそれが作戦の一つで、意識的に知らないスイーツを入れ込むことで、購買者の好奇心を刺激したいとのことだ。

要約するとそんな内容が、図や写真などを使ってわかりやすく簡潔に書かれている。

「どう？ 読んでて変なところありますか？」

「内容は大丈夫だと思えます。誤脱字が三つだけあったので、赤で丸をつけました」

左側から松田さんが訊ねる。わたしは視線を資料に落とすまま答えた。

「ありがとうございます」

「いえ。これくらいしかお手伝いできないので」

言いながら、資料を彼のデスクに戻す。ちらりと見上げれば、松田さんは少し申し訳なきような顔をしているが、寧ろ逆だと思った。わたしにもう少しできることがあれば、こんな風に残業なんてしなくてもよかったかもしれないのに。

広いフロアで、残っているのはわたしたちふたりだけだった。

松田さんはほぼ完成した資料にホツとしたのか、修正箇所の書き換えを終えると、ノートパソコンの横に置いていた紙コップを手に取り口を付けた。

自身は、ブラックコーヒーだ。

記憶を辿る限り、お昼休みの時間にはもうそこに置かれていたように思うので、すっかり冷たくなり、美味しくなくなっているのだろう。たった一杯のコーヒーも飲みきれないくらい集中して資料を作っていた、ということなんだろうか。

紙コップに付けられた彼の唇に、自然と視線が吸い寄せられる。

「ちなみに、谷川さんは今回の第四弾って売れると思います？」

紙コップをもとの場所に戻すと、松田さんが訊ねた。私は急いで彼の唇から視線を逸らし、小さく咳払いして答える。

「うーん、どうでしょう。正直、わからないです。元のスイーツを知らないのです、味のイメージが湧かないことがプラスなのかマイナスなのか……そういうフレーバーのグミを食べるって、結構勇気いるかなあ、とか」

好奇心が刺激されるというのは一理ある。

でも、だからといって買うかと訊かれると、即答はできないかもしれない。やっぱり、買うからには確実に美味しいと予想できるものが食べたいし。

「やっぱりそう思います？」

「え、松田さんですか？」

「自分でこんな資料作っておいてなんだけど、そうですね」

きまり悪そうに笑う松田さんが、眉根を下げて続ける。

「おそらく企画部はこんな風に考えているんだろうなってことを文章化してみたけど、正直俺は第三弾までと同じ王道な路線で行くべきだと思っただんです。購買層が一度は味わったことがあるけれど、グミで表現するには複雑なフレーバーの」

ニューヨークチーズケーキに、タルトタタン。クレームブリュレ。

これらはほんの一部だけど、第三弾までに開発、商品化したフレーバーだ。いずれもグミの割に再現度が高く、とびきり評判がよかった。

「でも、企画側もあれこれ考えて、今回は趣向を変えようということになったのであれば、それに乗っかるべきなんですよ。結局、何が売れるかなんて世に出てみなければわからないんですから。」

俺たちの仕事は、それをできる限り応援することなんだよ」と

「……そうですね」

わたしは松田さんからの問いかけに対し、間違った回答をしてしまったのだと気が付く。売ろうとする側が迷ってはいけなかったのだ。

わたしたちはあくまで営業であって、商品をジャッジする立場じゃない。一度出した商品に対して不満を述べても仕方がないのだ。自社の商品のいいところをアピールし、自信を持って売り込まなければ。

「——教えてくださって、ありがとうございます。わたしたちが商品の一番の応援団でいないといけないですよ。その気持ちで、明日の商談に臨もうと思います」

「いや、教えるなんて。谷川さんと話していて、ふと思っただ。寧ろ、俺としては君に教えてもらったように感じてるよ。こちらこそ、ありがとう」

松田さんはそう言って、わたしの顔を見つめた。そして、その目が優しく細められる。

「いえ、そんな……」

そんな柔らかな笑顔を向けられると、照れてしまう。

普段の会話の中で、彼がこうやってわたしと目を合わせてくれることは少ない。だから、すごく貴重な出来事のように嬉しい。

もし彼が本当にわたしを疎ましく思っているのだとしても、こんな表情を見せてくれるということとは、まだ挽回の余地はあるのかもしれない。

せめて部下として信頼してもらえようになりたい。わたしは、彼の下で成長したいのだ。

わたしはぐつと拳を固め、彼をまっすぐに見据えた。

「……松田さん、もしわたしに足りない部分があったら、ハッキリ教えてください」

その決意を彼にもわかっているほしい。わたしは意を決してそう口にした。

「わたしは営業の仕事を齧り始めたばかりで、昨日お話ししたように、それまで熱心に何かをやり遂げたことのあるような人間ではないです。でも、この会社に採用してもらって、松田さんと一緒に仕事をさせてもらえるようになってから、すごく楽しいんです。もちろん大変なこともありますけど、大変な中にも面白さがあって……ひとつ仕事をこなすたびに、もっと仕事を好きになっていきます」

松田さんと何かを成し遂げること、新しい発見があり、学びがあった。

わたしに新しい世界を教えてくれる松田さんを尊敬している。だからこそ、彼には認めてもらいたい。

「気が付かないところで大きな失敗をしていたり、松田さんが思うようには仕事を進められていないかもしれませんが、わたしはこれからも松田さんに指導してもらいたいです。たとえば、松田さんがそう思っていないなくても、今まで以上に頑張りますから」

「ちよつと待って」

熱心に訴えるわたしに、松田さんが慌ててストップをかける。そして、小さく首を傾げた。

「俺が『そう思っていない』って、どういうことですか？」

彼が不思議そうに訊ねる。わたしの言葉の意味がわからないと言いたげだった。

「わたし、松田さんの仕事に差し支えるようなこと、してませんか？ もしかしたら、松田さんが求めている領域にまで達していないんじゃないかと思って」

「そんなことないですよ」

間髪を容れずに、語気の強い否定の言葉が返って来る。珍しく強い彼の語調に、私の口から「え」と間の抜けた声が漏れた。

「谷川さんは、とてもよくやってくれていると思います」

「ほ、本当ですか？」

「もちろん。一度言ったことはきちんと覚えてくれますし、理解も早い。取引先の評判も上々です。俺には逆に、どうして君がそう思っているのかがわからないくらいです」

意外だった。松田さんは、わたしを評価してくれているという。

彼の口ぶりや驚いている反応からして、わたしに気を遣ったりだとか、嘘を吐いたりするようには思えなかった。

「何かありましたか？ 他の社員からそういったことを言われたりとか」

彼はどうやら、周囲から何かを吹き込まれたのではと考えたらしい。表情がみるみる険しくなり、声のトーンが一段落ちた。

「い、いえ。そういうことは、まったく」

「じゃあ、どうして」

「……………」

どう答えていいものか少しの間逡巡し、わたしは結局、思っている事柄を素直に伝えることにした。

まず、彼のわたしへの態度が他の部下に対するそれと比べて、一線引いたように感じていること。それらの理由を考えたときに、自分の働きがよくないからではないかと考えたこと。

昨日のわたしの失言については触れないことにした。

松田さんが職場においてわたしをどう評価しているかと、女性としてどう思っているかはまた別の話だ。今、そっちの話をするのは行き過ぎている。

わたしの言い分を聞き終わると、彼は眉間に皺を寄せて目を閉じた。

そして、細く長い息を吐いたあと、「本当に申し訳ない」と沈痛に述べた。

「谷川さんがそう感じている以上、何を言っても嘘に聞こえるかもしれないんだけど……でも、誤解です。俺は自分の後輩に対して、接し方に差をつけようとは思っていないし、谷川さんにだけ違う態度を取っているつもりはありません。寧ろ、せっかくなうちの会社に入ってきてくれた貴重な女性の営業ですし、少しでも居心地がいい職場だと思ってもらえるように、丁寧に応対しようと思がけていました。けど、それが逆に君を不安にさせてしまったのかもしれないですね」

わたしが一線引かれていると感じていた部分は、寧ろ松田さんにとっては気を遣ってくれていた箇所だった、ということなんだろうか。

「初めて顔を合わせたときのこと、俺は特に意識していませんでした。……不快だったのなら、

すみません」

「あの、そんなに謝らないでください。謝ってほしくて言ってるんじゃないんですっ」

真面目な松田さんにとって、そのつもりがないことで部下を悩ませていたという事実はかなりショックだったらしい。わかりやすく肩を落として落ち込む姿に、こちらのほうが申し訳なくなってきたら、わたしは焦ってそう言った。

「わたしの思い違いだとわかって、ホッとしました。もしわたしを自分の下に置いておくのが辛いと感じていたら、つて……不安だったのよ」

「そんな風を感じたりしていません。こうして残業をお願いしても、谷川さんは快く引き受けてくれますし、とても助けられています。逆ですよ。谷川さんがいてくれることで、俺は仕事を進めやすくなっています」

松田さんは緩く首を横に振り、またふっと表情をやわらげた。

瞬間、私の鼓動が早鐘を打ち、頬に熱が集まるのを感じる。

「俺のほうが、これからもずっとサポートしてほしいくらいです。でも、谷川さんが仕事を覚えたら独り立ちしてもらわなければいけないですから、それができないことはわかっています。その日が来るまでは、俺と一緒に仕事をしてもらえるとありがたいです」

「こ、こちらこそ。ありがとうございます！」

疎まれていたのかも……というのは、わたしの思い過ぎだったみたいだ。

松田さんがわたしの仕事を評価してくれているのがわかっただけで、もう十分だった。

もうしばらくは、松田さんの下で働ける。彼の役に立つことができる。今は、それ以上を望む必要はないのだ。

わたしは未だに煩い心臓を宥めるため、深く息を吸い、彼に笑みを向ける。

松田さんはわたしの様子に微笑を浮かべると、腕時計に視線を落とした。

縁取りはゴールドで、黒色の革ベルト。同じ黒色の文字盤には白色のインデックスとともにムーンフェイズが刻まれている。彼はいつも、好んでこの時計を身につけているようだ。

「谷川さんのおかげで今日中の仕事も終わりましたし、そろそろ出ましようか。あ、ところで」

「はい」

「もうこんな時間ですけど、お腹空いてませんか？」

質問の意図を理解するのに、数秒掛かった。もしかして、と心臓が跳ねる音が、再びわたしの胸の内で聞こえる。

「何か、食べて帰りませんか。遅くまで残ってもらったので、ご馳走させてください。もちろん谷川さんの迷惑でなければ、ですけど」

「い、いいんですか？」

わたしは食い込み気味に訊ね返した。

彼にとつては罪滅ぼしのつもりで、それ以上の意味はないのかもしれないけれど、嬉しいお誘いだった。わたしに断る理由なんてない。

わかりやすく嬉々とする表情が可笑しかったのか、松田さんは笑いながら頷いた。

「はい。じゃあ、支度して行きましょうか」  
「はいっ！」

声を弾ませて答えると、わたしはデスクの上の整理に取り掛かった。

3

出勤前、会社の最寄り駅の中にあるコンビニを覗くのは、入社当初からの日課になっている。その日の午前に飲むお茶やコーヒーなどを購入するためと、他の菓子メーカーの新商品をチェックするためだ。

当然ながら、店舗の面積、菓子売り場の棚の広さには限りがある。あの狭い空間に、各メーカーは少しでも多くの自社商品を置きたいと願っている。

ゆえに、棚の現状がその時期のメーカーの勢力図になる。このあたりは月に一度、早い場合は二週に一度と、変動がかなり見受けられるので、チェックが欠かせない。

わたしは無糖のカフェオレを一本持つて、菓子売り場の棚のほうへと向かった。

スナックやクッキーなどが置かれているエリアの先にチョコレート類、さらにその先に袋入りの飴やグミなどが吊り下げて陳列されている場所がある。

——あつたあつた。『ドルチェガミー』の第四弾。

わたしと松田さんで卸の各社に売り込みをした新商品だ。

『ドルチェガミー』は、吊り下げ棚の上から二段目という、一番目に入りやすい好位置を陣取っていた。うん、条件的には申し分ない。このコンビニチェーンに卸してくれているのはクリハマさんだから、大場さんが頑張ってくれたということなのだろう。

まだ発売して数日しか経っていないけれど、商品自体の評判も、SNS等で検索して調べる限りでは悪くないみたいだ。

わたしは『ドルチェガミー』を手にとると、カフェオレとともにレジに持って行った。

わざわざ購入しなくても、社内に商品のサンプルが山ほどあるのは知っている。けれど、自社製品は応援の意味も込め、目に付いたときに買うようにしているのだ。

それらが入ったレジ袋を掲げ、コンビニを出て、会社への道を歩いていく。あつという間に、六月も終わろうとしていた。

一月の途中に入社したから、転職して五ヶ月ほどが経ったことになる。自分ができることをがむしゃらにやり続けた五ヶ月だった。

だから、正直なところ、まだ半年近く経った実感はないけれど、朝、外に出たときの暖かさや、降り注ぐ日差しが強さで、辛うじて時間の経過を感じることができている。

駅から続く大通りを真っすぐ歩いていくこと五分。ちょうど交差点に差し掛かる手前の、十三階建てのオフィスビルの中に、青葉製菓が入っている。

六階と七階が青葉製菓の東京支社で、わたしの所属する営業部は六階にある。エントランスを抜

けて、エレベーターホールに向かった。

上昇ボタンを押すと、二基あるエレベーターの右側が降りてきた。朝の出勤時間、いつもならだいたい同じ会社や、他社の社員と一緒にすることが多いけれど、今日はめずらしく独り占めの日だった。

「おはようございます」

エレベーターを降りると、まず『青葉製菓』と社名の入ったプレートが目に入る。すぐ横にある自動ドアの先にいる経理部の面々に挨拶をして、営業部の自分のデスクにトートバッグとコンビニの袋を置いた。

「おはよう、谷川さん」

「おはようございます、小田課長」

椅子に座ろうとしたところで、となりの島のデスクに座る小田課長が席を立ち、わたしのほうへ向いた。わたしは彼を見て会釈をする。

小田課長は三十代半ばで、松田さんの直属の上司に当たる営業部第一営業課の課長だ。学生時代にラグビーをしていたらしく、大柄でがっちりした体型で、声が人一倍大きい。いかにも営業、といったイメージの人。

「今日の予定は、どうなってる？」

「えっと……十時に松田さんとサンプルの受け渡しで外出して、お昼過ぎに戻るようになっていきますが」

「そうか」

小田課長はひとつ頷いてから続ける。

「君と松田くんは、一柳部長から伝言だ。ふたりに相談したいことがあるから、二時に七階の会議室に来てほしいとのことだ」

「はい、承知しました」

「よろしく」

小田課長はそう言うと、椅子に座り直してノートパソコンの操作を始めた。

わたしも椅子に座ると、バッグの中からスマホを取り出した。そして、メッセージアプリを起動する。

履歴の一番上にある松田さんとのやり取りを呼び出すと、メッセージを打ち始めた。

『おはようございます。今日サンプルの受け渡しのこと、一柳部長が二時から空けてほしいとのことでした。予定は大丈夫でしたっけ？』

送信した直後、既読になるメッセージ。返信は、すぐに返ってきた。

『おはよう。そのあとは社内で資料作成の時間に充てるつもりだったから、問題ないはずだよ』

『なら大丈夫ですね。多分松田さんが出勤したら、小田課長のほうからそういうお話があると思います』

わたしは口元を綻ばせながら手早くそう打ち込むと、再び送信ボタンを押した。

程なくして松田さんは出勤してくるのだし、わざわざ今メッセージアプリを通してまで伝える内

容ではないのかもしれない。

でも、こうして気軽にやり取りができる関係になったことが嬉しくて、ついついメッセージを送ってしまうのだ。

松田さんの役に立てていないのではないかと不安を吐露したあの夜。松田さんは、残業のお礼にと食事に関連して行ってくれた。

場所は、駅前のイタリアン。決して敷居が高い雰囲気ではなく、仕事終わりに気軽にに入れる気取らないお店だった。

出される料理はどれも飾らなくて美味しく、松田さんは外国のビールを、わたしはグラスワインの白を飲んだ。

「この店、たまに会社の飲み会とか他メーカーとの懇親会で使ったりするんだ。安くて美味しい、適当にコースにしてくれたりするから、使い勝手よくて」

「いいですね。わたし、こういうお店大好きです！」

「そう言ってもらえてよかった」

高揚する気持ちを抑えきれず破顔するわたしに、松田さんは優しい眼差しを向ける。  
わたしたちは店の中ほどにある、窓際のふたり掛けの席に座っていた。奥のソファ席にわたし、手前の椅子に松田さんという形で向かい合っている。

店内のオレンジ色のやわらかい照明が、松田さんの凛々しくも優しい顔立ちを照らしていた。会社で見る彼の顔とはちょっと違って見えるのが新鮮で、ぎゅっと胸の奥が苦しくなる。

松田さんに誘ってもらって、食事をしている。それも、仕事以外の時間で。

非日常に、わたしは少しはしゃいでいたのだと思う。松田さんは、じっとわたしの顔を見つめた。

「……どうしました？」

「いや、会社にいるときと少し雰囲気が違うな、と思って」

「そうですか？」

奇しくも、わたしと松田さんは似たようなことを考えていたらしい。そんな偶然にドキツとする。わたしが訊ねると、彼がゆっくり頷く。

「会社ではしっかりしてて、落ち着いてる感じなので」

「それって、案外落ち着きがないってことですか？」

「ちょっと煩くしすぎてしまったらどうか。」

「違いますよ。悪い意味に取らないでください」

松田さんはビールを一口呷ると、焦って首を横に振る。

「寧ろ、逆です。年相応な部分が垣間見えて、安心したというか……ほら、俺の二つも下なのに、仕事に対して真面目で、自分の役割をしっかりとこなしてくれるから。こういうところもちゃんとあるんだって知って、嬉しくなりました」

そこまで言うと、松田さんはハッと顔色を変えて、それから、きまり悪そうに再度口を開く。

「……あー、嬉しくなるって、ごめん、なんか気持ち悪いですよね」

「そんなことないです」

わたしは即座に否定した。気持ち悪いどころか、嬉しいくらいだ。自然と頬が緩む。

「松田さんがわたしの個人的な部分に目を向けてくれたっていうだけで、ありがたいですっ」

「ありがたいって」

大げさだという風に松田さんが噴き出す。

「それはそうですね。松田さんは尊敬する上司ですから、認められたって気持ちはどうしてもあります」

小皿に取り分けられたベビーリーフのサラダを口に運びながら言った。

美味しいし、楽しい。この空間にいと、そのつもりがなくてもお酒が進んでしまう。

「もうとづくに認めてますよ。さっきも言いましたけど、谷川さんは俺の信頼する後輩です」

「わたし、それについてはまだ納得してません」

話しながら、頭の中のスクリーンに男性社員がふたり、急に飛び出してきた。そう、松田さんと仲のいい後輩男性社員の、あのふたり。

「わたしも、彼らと同じように接してもらいたいです」

「同じ？」

「女性だからって、気を遣わないでください。彼らと立場は変わらないんですから、もっとフランクに接してほしいですよ」

「フランクにですか……」

「わたし、勤務年数で言ったら彼らよりもずっと後輩ですし、仰る通り松田さんの二つも年下です

よ。それでも、ダメですか？」

さっきは核心を突くことはできなかったというのに、今それが叶っているのは、この非現実な空間のせいか。はたまたお酒が入って気が大きくなっているからか。わたしにもわからない。

でも、このチャンス逃してしまったら、もう永久にそれを追及するきっかけを失ってしまうような気がした。

さっきの、オフィスでの真剣なやり取りがあつて。そのあと、こうやってお互いプライベートな時間の中で、構えずに話をしている今だからこそ、訊いても許される気がした。

「俺、そんなに一線引いてる感じしますか？」

「します」

「うーん、そうですね……」

困惑の表情を浮かべる松田さんに、昨日の別れ際を思い出す。わたしが口を滑らせたときも、彼はこういう顔をしていた。

「二ヶ月この感じだったので、いきなり直すのは難しいんですが」

「そこをなんとか」

暫く渋い顔をしていた松田さんだったが、あまりにも強固な訴えに、ついに折れたらしい。

「わかりました」

と、心を決めた様子で頷いた。

「――相手に自分の要求を呑んでもらうには、結局、熱心かつストレートに粘るのが一番効くんで

すね。客先で使わせてもらいますよ」

まるで、普段の営業活動の参考にしようと言わんばかりの言い方に、今度はわたしが嘖き出した。

「……谷川さんが望むなら、こういう感じはどう、かな」

言いながら気恥ずかしいのか、少しはにかんで笑う松田さん。

「つ……いい、いいと思います。それでお願いします！」

顔が熱くなったのは、お酒を飲んでるからだけじゃないのは明白だった。わたしは左手で火照った頬を覆った。

可愛い。彼のその照れた言い方が妙にドキドキする。

普段はキリッとして頼りがいがある松田さんなのに、困ったような、微笑むような——庇護欲を掻き立てられる表情を見せてくるなんて、反則だ。

「急に全部直すのは無理かもしれませんが——いや、無理かもしれないけど。そのうち、慣れるよね」

「ありがとうございます、期待してます」

早速いつもの癖が出てしまったのを訂正している彼だけど、定着させようと頑張ってくれる姿が嬉しい。

「——わたしも松田さんが早く慣れてくれるように、いっぱい話しかけますね」

わたしは、彼のその表情を独占している喜びに頬を緩ませ、そう言った。

あまり考え過ぎずに言葉の応酬ができるのも、お酒のいいところだ。

とはいえ、多少は残っている冷静な部分が「さすがにこれは馴れ馴れしいかも」と警笛を鳴らす。友達じゃないんだから、凶々しすぎるだろうかと。

「……じゃあ、ええと、うん」

ところが。予想外にも彼は、少し言い淀んだあと、小さく笑みを浮かべた。

それから、ほんの少しだけ視線を彷徨させたあと、わたしの瞳を真摯に見つめる。

「早く慣れるように——話しかけてくれると嬉しい」

一瞬、周囲の雑音が遠のいた。

まるでこの場にわたしと松田さんのふたりだけになったかのように、特別な空気が流れるのを感じる。

わたしはその雰囲気呑まれながら、微かに震える声で「はい」と返事をするのが精いっぱいだった。

心臓が壊れてしまったんじゃないかと心配になるくらい、早鐘を打っている。その音は、今後わたしと松田さんに訪れる何かに対する期待に満ちていた。

松田さんが「よろしく」と言いながら、手にしていたグラスを前方に差し出したのを見て、わたしもそれに倣い、慎重にワイングラスを近づける。

ドリンクが到着したときにも一度乾杯を交わしたけれど、そのときとはまったく意味合いが違う。勝手に、彼との距離が縮まったような気がした。

実際、「気がした」だけではなく、その日を境にわたしと松田さんの距離はかなり近くなって